

青と緑と日本橋

- 空を取り戻すプロジェクトの先を考える -

21U1103 石井 冨

21U1113 葛城まおり

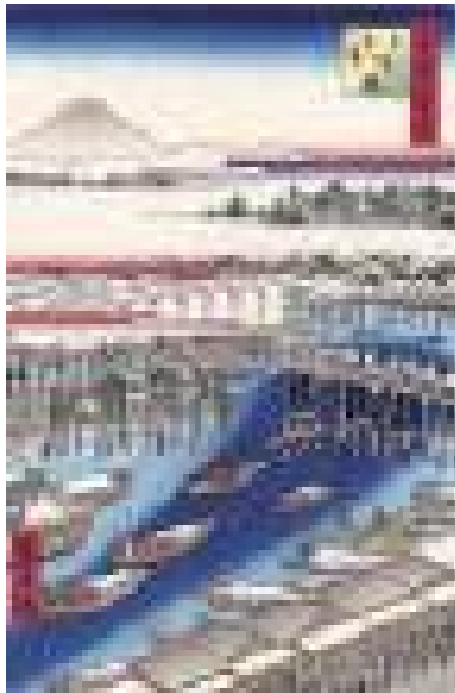
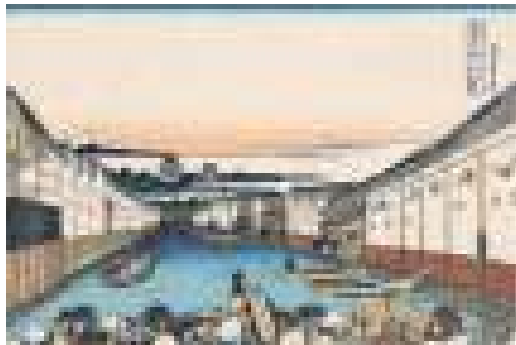
敷地

日本橋川



神田川の分流で隅田川に合流する川。亀島川や楓川に分流する全長 4.84km ほぼ全流路で首都高速道路の高架下を流れていて、川面が開けるのは約 500m ほどしかなく、川の濁った水が、より暗く映る。

歴史



◁日本橋を描いた浮世絵。
かつて日本橋川が街の中心
地として賑わっていたこと
が伺える

日本橋川は人工的に造られた運河。

1590 年（天正 18）に江戸入りした徳川家康は、海辺を埋め立てて土地を拡張し、網の目のように走る水路を造り上げるなど、江戸の「都市計画」に着手した。日本橋川もその一つで、大部分を人の手で掘削してつくられたもの。以降、江戸東京の商業の中心としてこの水路と共にまちが発展していった。

背景



1964 年、東京オリンピックに間に合うように、河川や道路の上に高速道路を巡らせた。日本橋川もその対象となり、日本橋は現在まで、そのほとんどが首都高速道路で覆われている。そのため、高速道路のもたらす暗い景観や、車の騒音など、様々な問題が重なり、かつて賑わいのあった日本橋川は、都市の中でネガティブな場印象を持つ場所となっている。

「日本橋に空を取り戻すプロジェクト」



長年景観の改善を求めた議論の末、日本橋の上を通る首都高都心環状線を、地下に移す工事が進んでいる。

地下ルートの開通は 2035 年、全面撤去は 40 年を予定している。



△左が日本橋の現状、右が 2030 年の高架橋撤去後のイメージ（画像提供：首都高速道路）

問題点



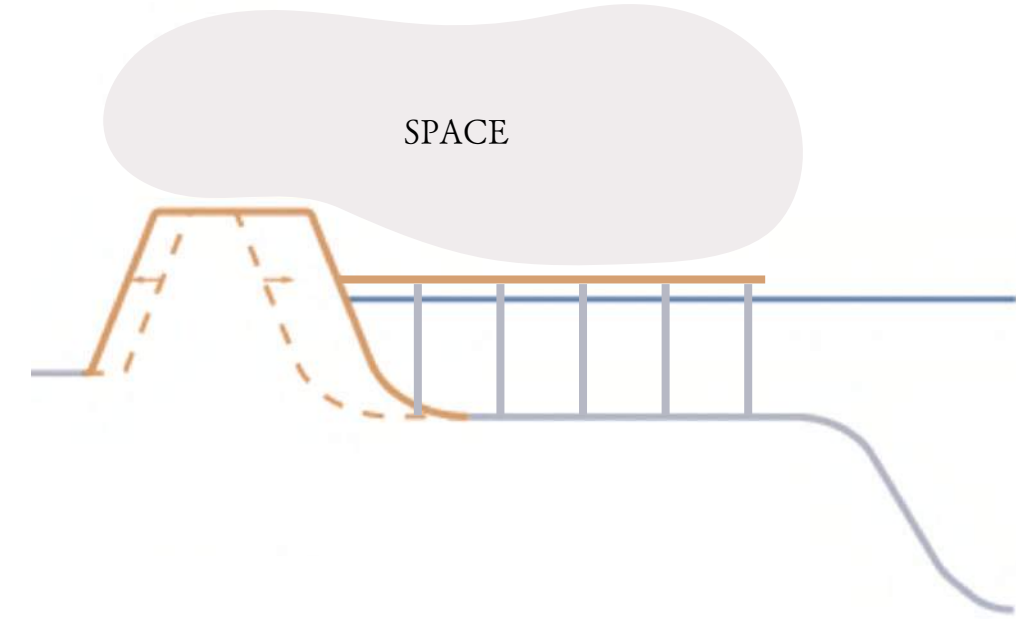
❶ 「日本橋に空を取り戻すプロジェクト」

首都高速道路の撤去による景観の改善のみを目的としたプロジェクト。
周辺の建築は日本橋川に余裕のない配置であるため、景観が改善されても、人が立ち入るスペースがない。

❷ 水面との距離

水害対策のため、日本橋川と周辺建築の間には、5~6mの護岸が設置されている。
この水害対策による物理的な距離が、水辺が都市から遠い存在と印象作っているのではないか。

解決策



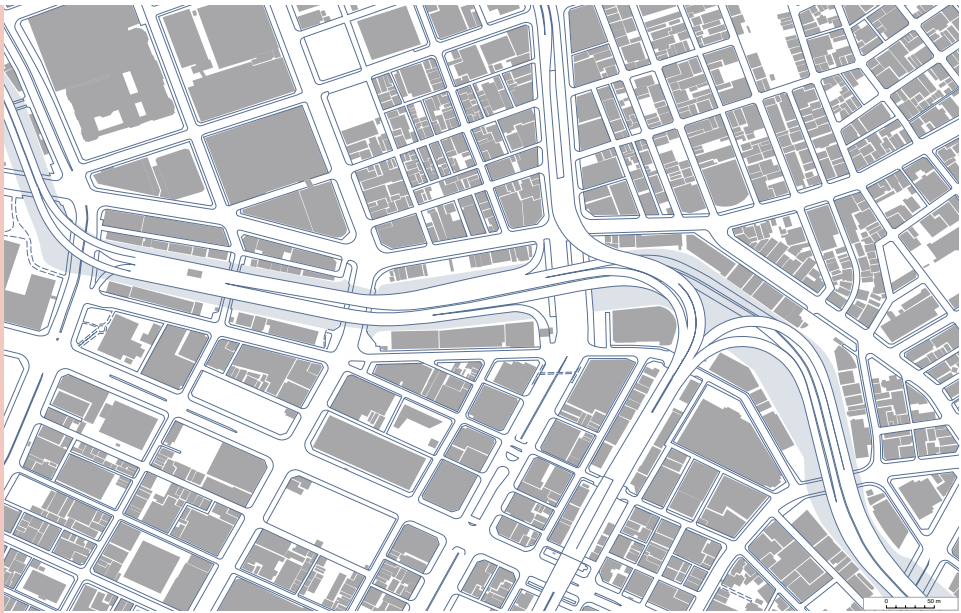
高速道路の撤去のみで終わらないよう、空間を作る。
また、水と人の距離を近づけつつ水害対策を考える。
水害対策による水面との距離は変えられないため、護岸を拡張、そして、水面に近づくようにデッキを設け、新たな空間を獲得する。

コンセプト

水辺とともに都市に公園が廻る景観

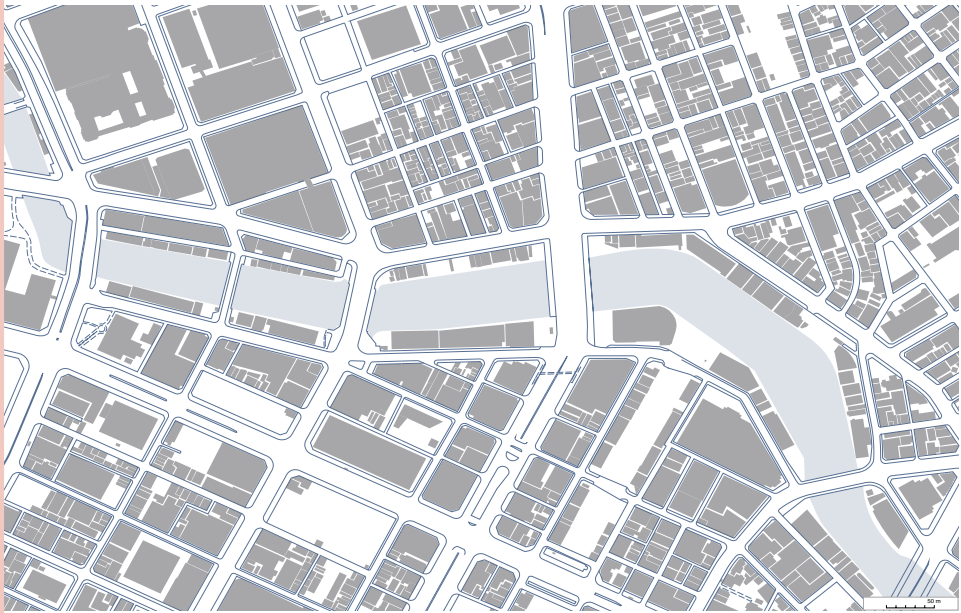
現在

日本橋川のほとんどが首都高速道路に覆われているため、空は見えない状態。川には日光も入らないため、濁った水がより暗い印象となっている。周辺の建築も、首都高速道路に背を向けるように立ち並んでいる。



2030 年

「日本橋に空を取り戻すプロジェクト」により、日本橋に空が戻る。
光が入り、明るくなり、日本橋川が街のシンボルとしての存在感を持ち始める。



20XX 年

高速道路が巡っていたこの地に、水辺とともに緑が巡る。明るく自然豊かになった景観を求め、周囲の建築のファサードが変化し開き始める。かつての賑わいが再び取り戻される。



全体計画

全体的な計画は

手法1：水面と地表面を緩やかに結ぶように護岸を拡張し遊歩道とすること

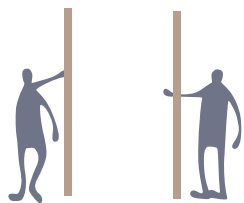
手法2：遊歩道にはセルフビルドを許容する仕組みを作り、能動的に利用できるようにすること

手法3：ボートをファニチャーとすることで水運を日常に溶け込ませること

上記のようなスケールの異なる3つのアプローチをすることで水辺空間を再考する



手法1：人間スケール



手法2：建築スケール

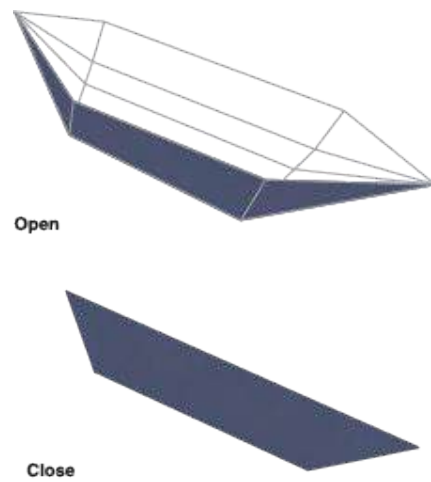


手法3：都市スケール

手法1

人間スケール：ファニチャーボート

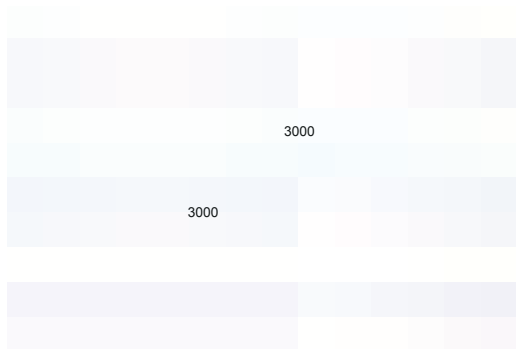
このファニチャーボートは折り紙に着想を得ているもので、開いているときには船になり、個人の力でも利用することができるものである。そしてこれを折りたたむと板状になり、避難階段のルーバーとしてや、板を束ねてベンチにするなど水辺の都市の中に散りばめることができる。



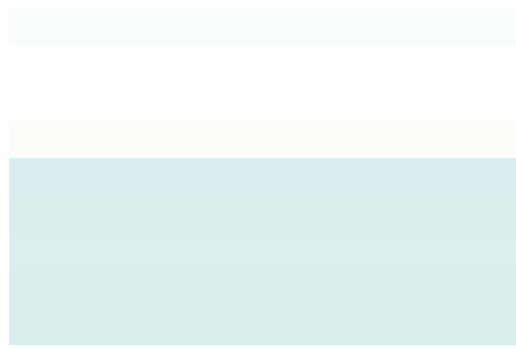
手法2

建築スケール：セルフビルド

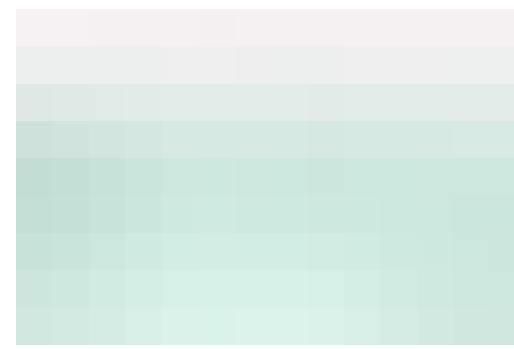
このファニチャーボートは折り紙に着想を得ているもので、開いているときには船になり、個人の力でも利用することができるものである。そしてこれを折りたたむと板状になり、避難階段のルーバーとしてや、板を束ねてベンチにするなど水辺の都市の中に散りばめることができる。



3000×3000mm ピッチグリッド



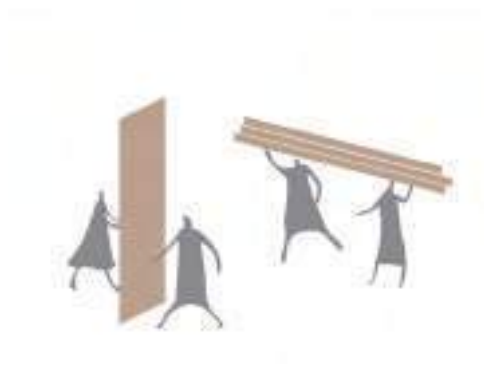
ジョイントをつくる



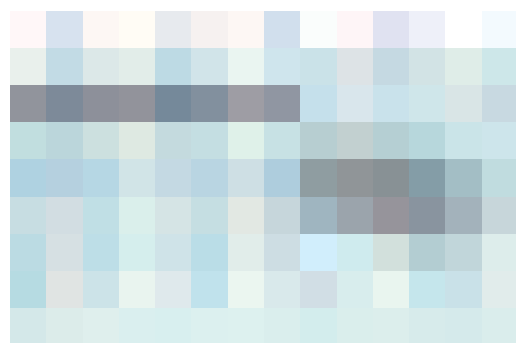
そこに自由に柱をたて、



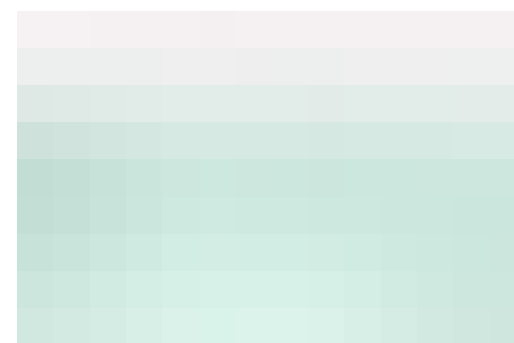
スラブを配置する



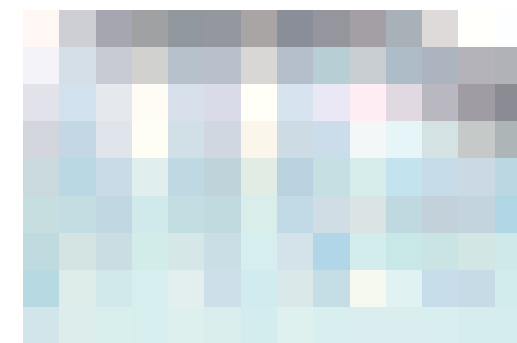
これらをセルフビルドすることで



水害が起きてもスラブだけ流される



柱だけが残る

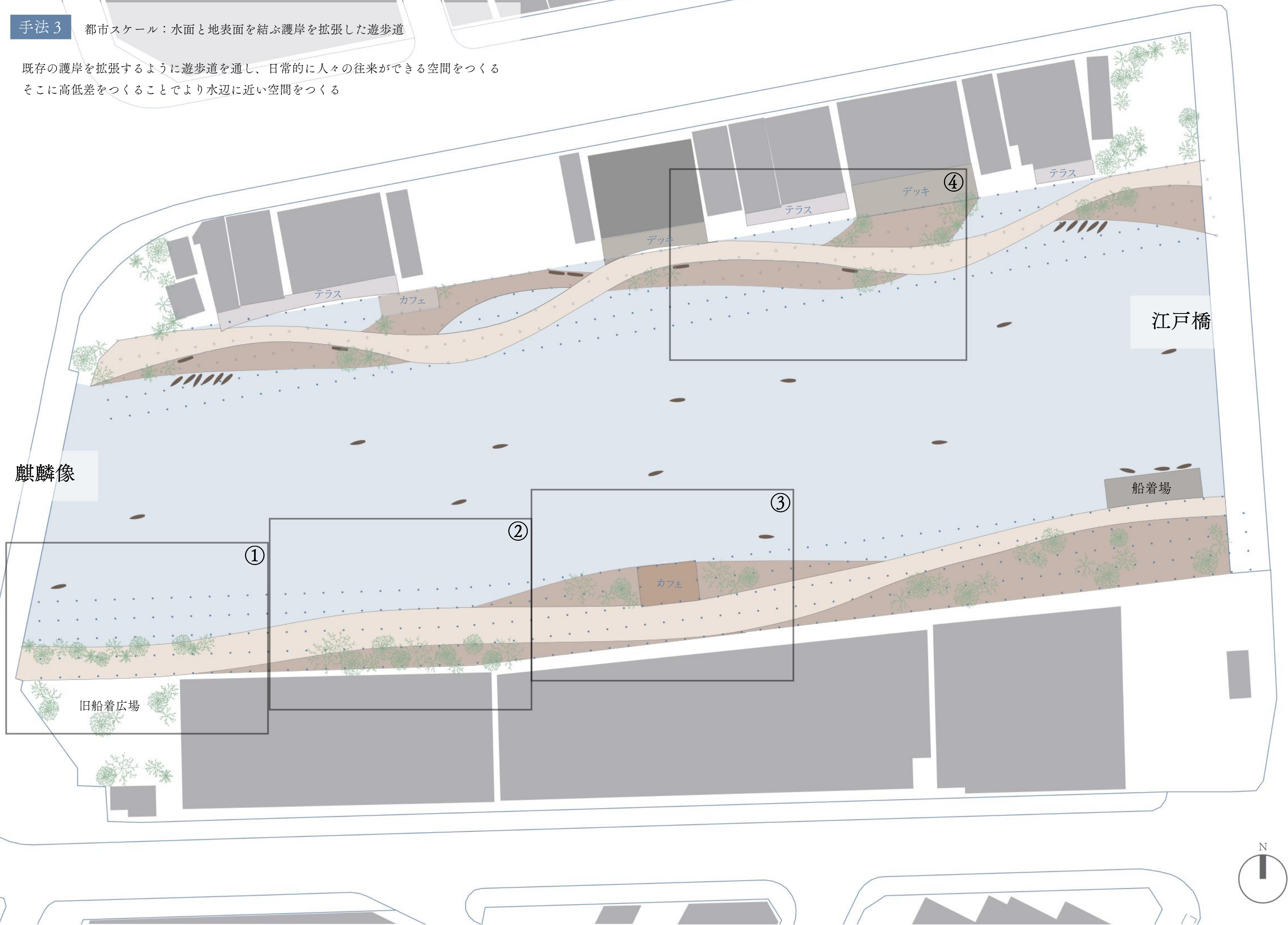


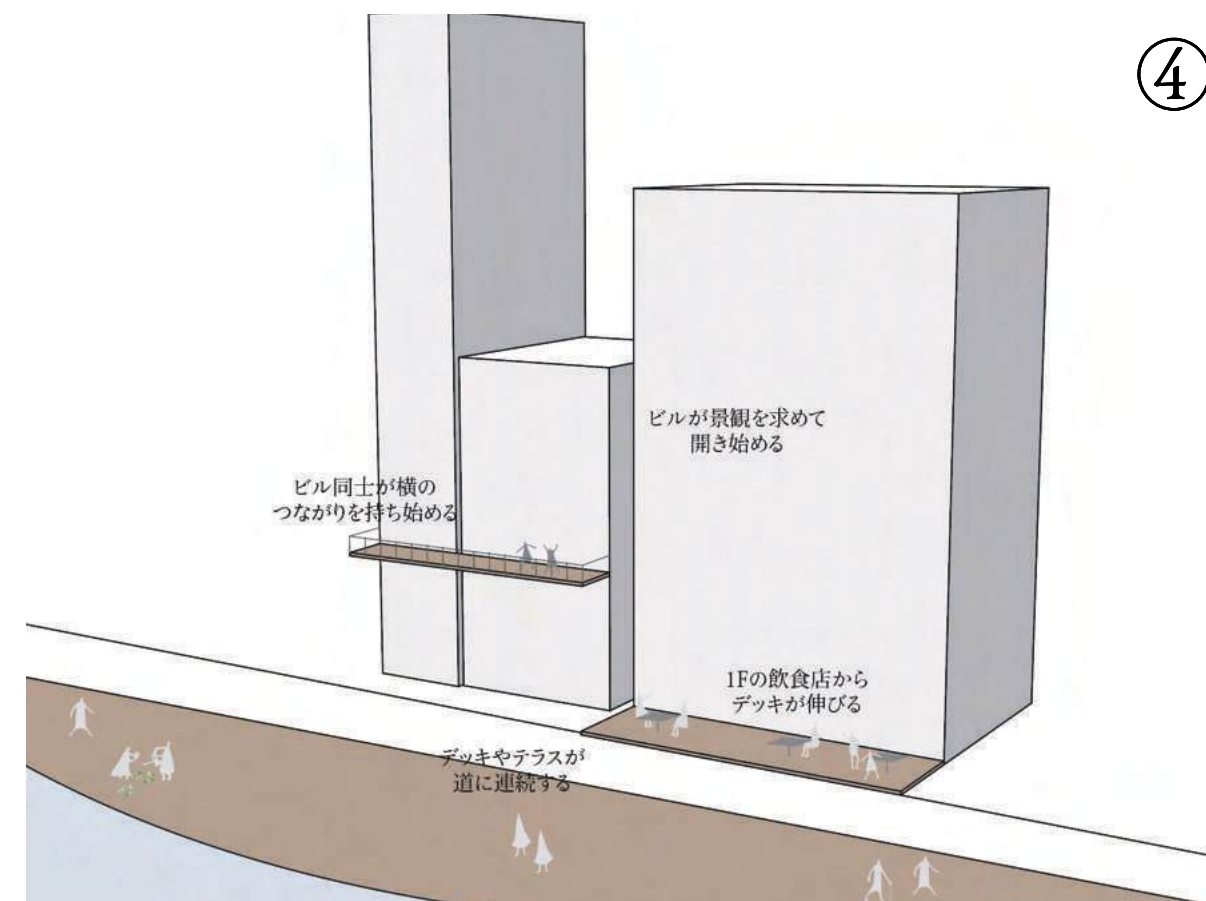
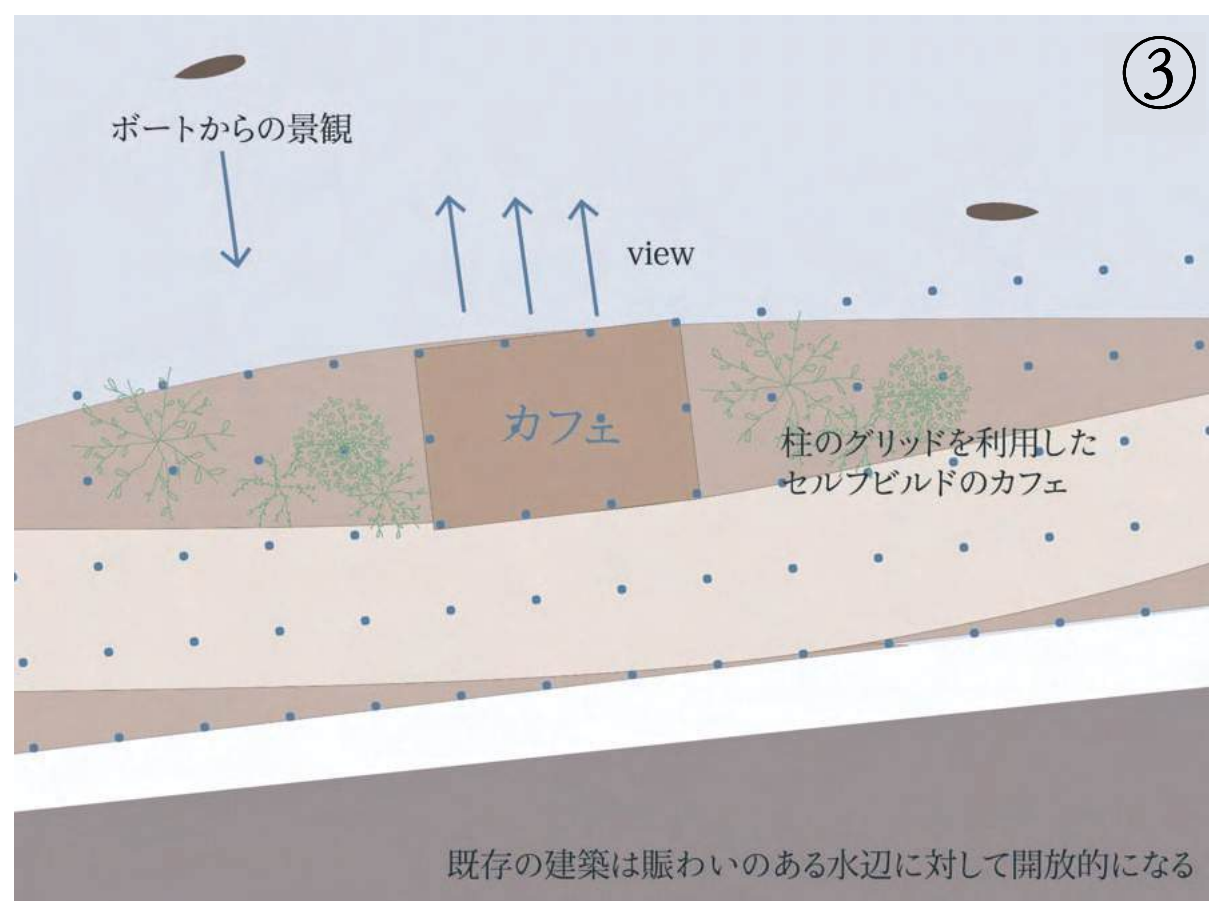
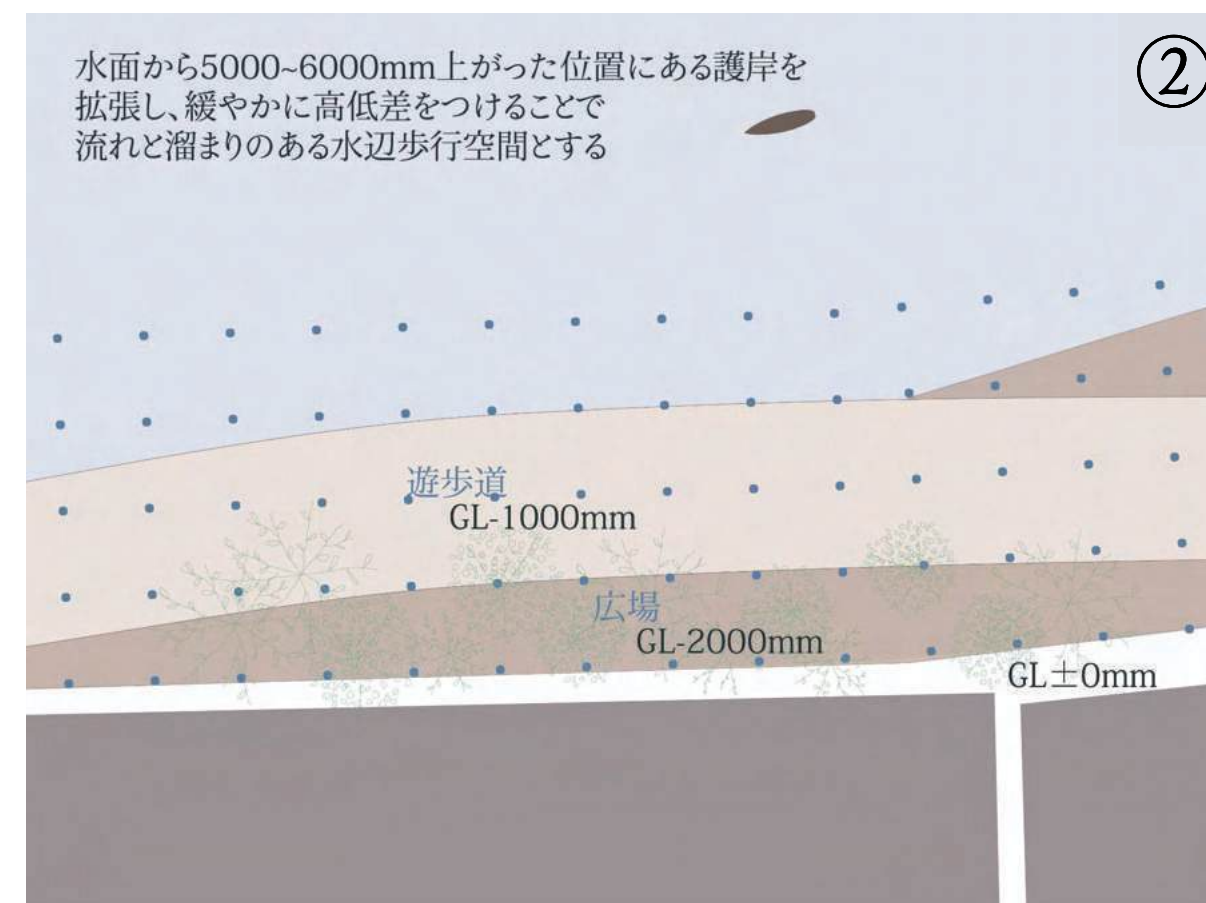
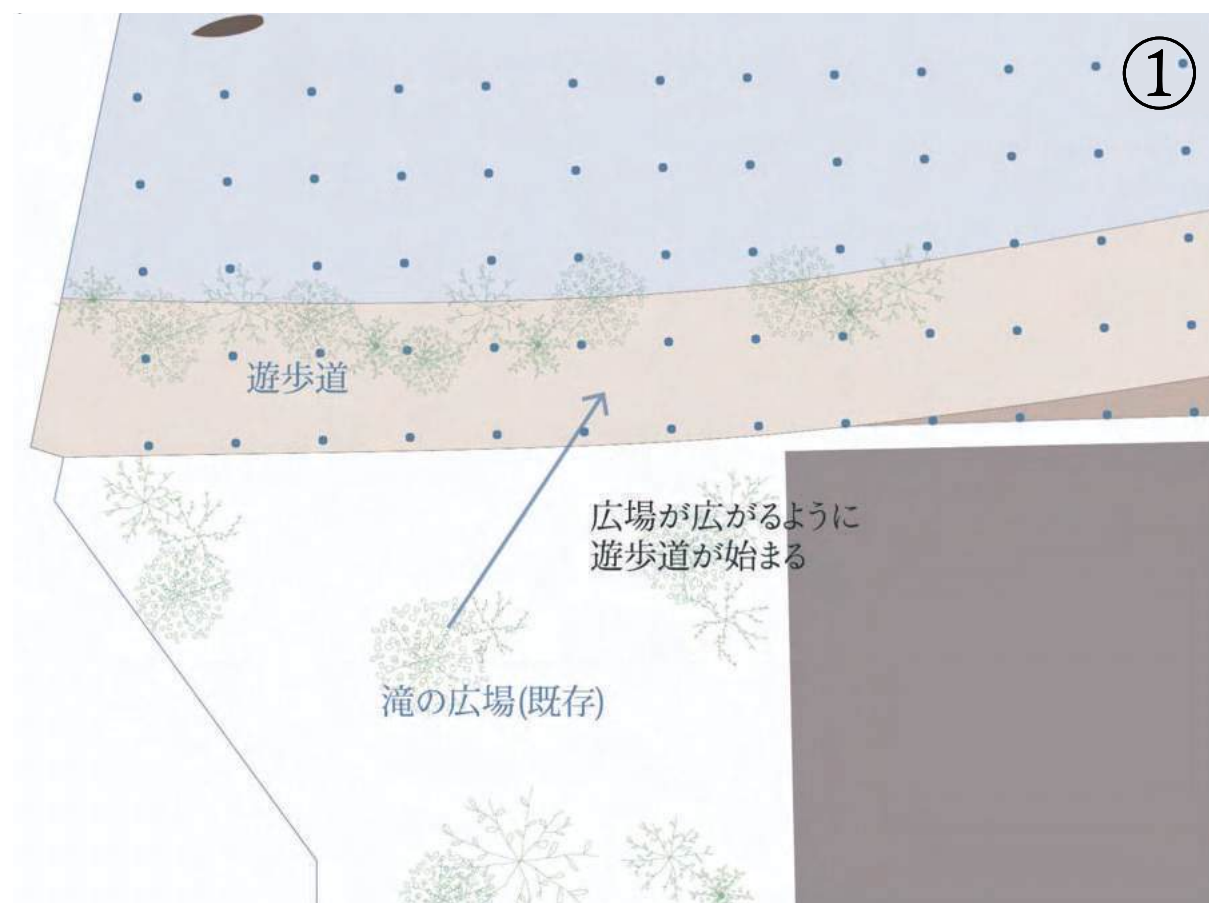
またセルフビルドできるようになる

手法 3

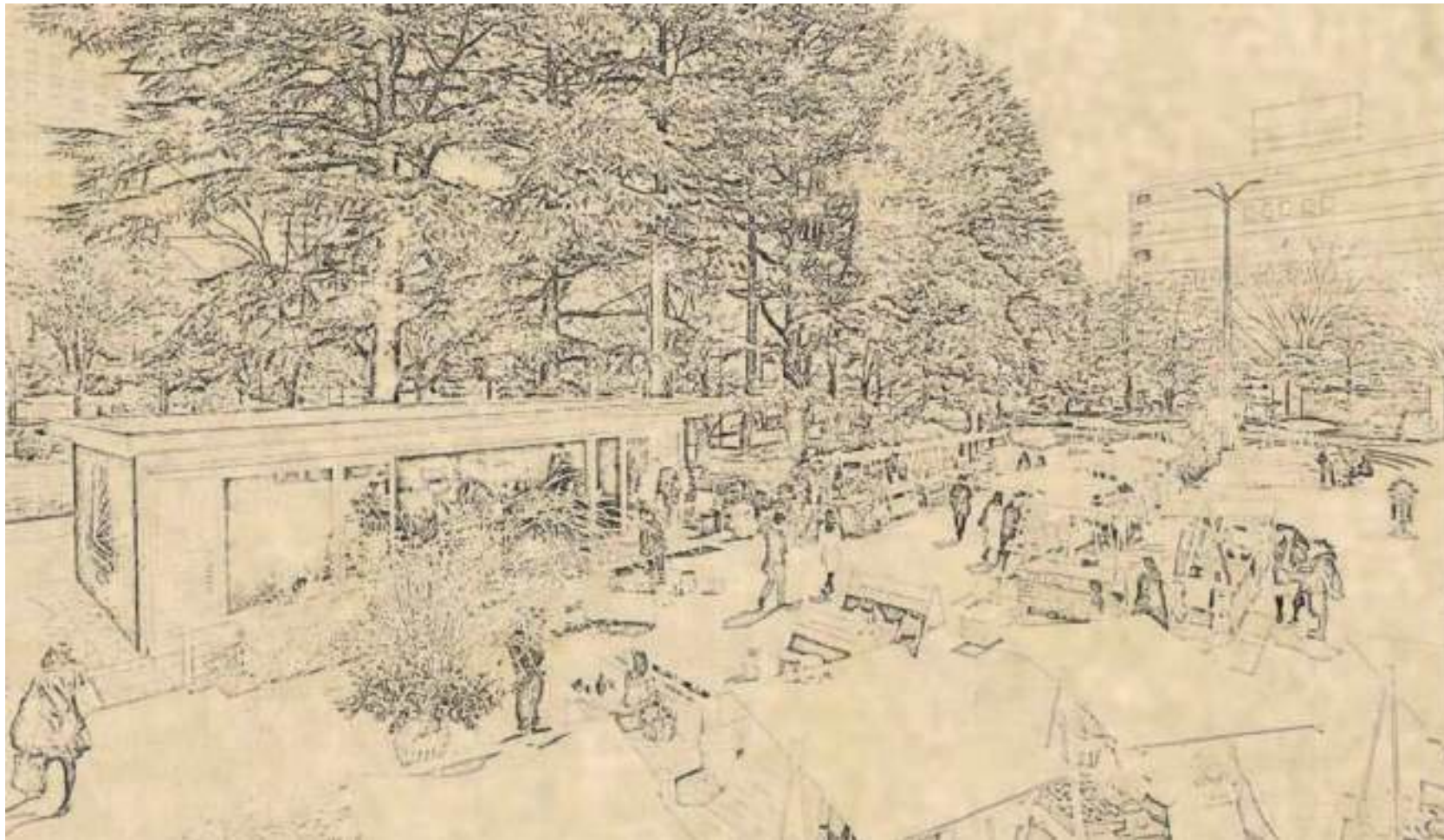
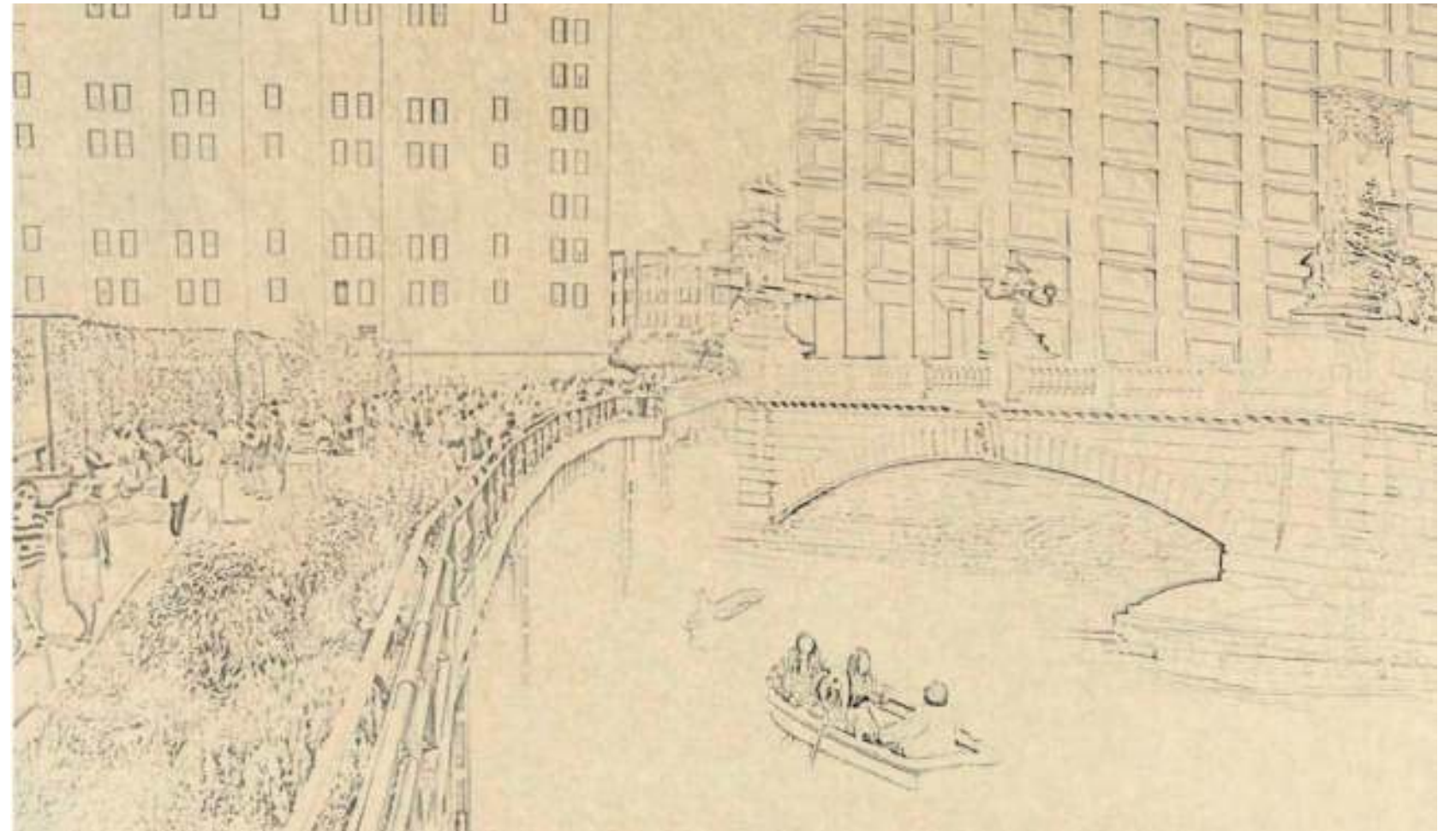
都市スケール：水面と地表面を結ぶ護岸を拡張した遊歩道

既存の護岸を拡張するように遊歩道を通し、日常的に人々の往来ができる空間をつくる
そこに高低差をつくることでより水辺に近い空間をつくる





かつて浮世絵に描かれた日本橋の風景は



もう一度その賑わいが水辺へと溢れ出す